戦争体験者インタビュー

１．海軍整備兵として見つめた太平洋戦争（瀧本 邦慶さん）・・・・・・・Ｐ２

２．淀川河川敷から見た長柄橋の空襲（坂上 貞夫さん）・・・・・・・・・Ｐ７

３．子育て中の戦争体験と食糧事情（清水 正子さん）・・・・・・・・・・Ｐ13

４．小学校卒業式前夜の大阪大空襲（岡田 匠さん）・・・・・・・・・・・Ｐ14

５．母に守られて助かった奇跡の子ども（松原 俊明さん）・・・・・・・・Ｐ18

６．学徒動員と学べない不満をぶつけた日々（竹立 威三雄さん）・・・・Ｐ20

７．母と子で乗り越えた戦中と戦後（京本 良子さん）・・・・・・・・・・Ｐ24

８．３回も招集された夫との戦争にまつわる思い出（高橋 菊江さん）・・Ｐ29

９．崇禅寺駅員として体験した空襲（石井 冨恵さん）・・・・・・・・・・Ｐ31

10．東淀川区最高齢が語る日中戦争（二村 良介さん）・・・・・・・・・・Ｐ37

11．浪商高校 戦後初の全国高校野球大会優勝（島田 雄三さん・山本 英夫さん）

・・・・・・・・・・Ｐ39

12．戦時中の村の暮らしを支えたお寺の娘さん（若林 幸代さん）・・・・Ｐ44

13．不発弾が変えた生きかた（藤野 高明さん）・・・・・・・・・・・・・Ｐ47

海軍整備兵として見つめた太平洋戦争

瀧本 邦慶(たきもとくによし)さん(92) 大正 10(1921)年　香川県三豊市生まれ
海軍整備兵として戦地へ。真珠湾攻撃、ミッドウェー海戦などを体験し、南方作戦ではトラック島で終戦を迎え帰還。若者に戦争を語り継ぐため小中学校など講演活動に活発。東淀川区在住。

大正 10（1921）年に香川県三豊郡桑山村で生まれました。今は三豊市豊中町というみたいですけどね。観音寺商業高校を卒業した 17 才の時に海軍を志願したんです。僕は陸軍が嫌いでね。この時代には徴兵制があって、20 才になるとほとんどが陸軍に取られることになっていました。中等学校に入ると教練があって、上級生は陸軍と同じような訓練を受けさせられるわけです。そうすると陸軍は歩くでしょ、重い荷物を背たろうて。あれが嫌でね。同じ兵隊に取られるんなら、早くから志願して自分の好きな海軍に入ろうと思って試験を受けました。身体検査と簡単な学力試験があって、昭和 14（1939）年 6 月に佐世保海兵団へ入団することになりました。

洗脳されても変わらぬ親子の気持ち

兵隊へ行く時の気持ち？　そりゃ小学校に入った時から軍国主義教育を受けて完全に洗脳されてましたから。学校の教科書は全部国が指定したものだけ、先生

は本に書いてあること以下は生徒にしゃべってはいけない。今からは想像もできないくらい軍国主義がピークの時代でした。

親も子も国民全体が洗脳されてたわけですよ。小学校１年に入ったら、男の子は五体満足なら兵隊に行って、死んだら靖国神社にまつわれるというのが最高の名誉だと教えられたんです。戦争に行くのは嫌やということなんて言えた雰囲気はありません。

父も元海軍の軍人でしたから入隊する日に「今から行って参ります」と挨拶すると「おう、行ってこい」と送り出してくれたのに対して、母は「気ぃつけて行っておいでや」と言うんです。それが精一杯の心遣いなんですよ。だって兵隊に行ったら死ぬんですよ。その覚悟の僕に「気ぃつけて」ってね。「死なないで」とは言えない。いくら国中が洗脳されているとはいえ、親の気持ちというのは変わらんもんじゃないですか。

僕自身も心の底では本当は行きたくないですわな。行ったって死ぬことわかってるんやから。私も大勢の人に見送ってもらって汽車に乗って、友達らが見えんようになったところでやっぱり涙が出ましたわ。

生命の危機を感じる“いじめ”

入隊すると陸戦の方法や船の上での生活、ボートやカッターの漕ぎ方など海軍兵としての基礎訓練を半年受けました。その後、自分が乗り込む船が決められました。「八重山」という 1200 トンの船で、機雷を戦艦に敷設するための敷設艦と呼ばれる船です。自分の乗る船は決まったんですが、当時「八重山」は日中戦争のシナ海での作戦に参加していたので海の上にいました。そこで商船に便乗して台湾のキールで「八重山」に乗り込むことになりました。

ここからが大変でした。海軍には悪い伝統が残っていたんです。いじめですね。「軍人精神注入棒」というので上級兵から思いっきり殴られる。船によって気質は違うと思いますが、うちの船は特にそれが激しくて「この船に乗っていたら殺されるな」と思うくらい厳しいいじめにあったんです。自ら退艦するためには、自殺するか逃走するかしかない。あとは専門技術や知識に関する試験を受けて受かると、違う兵科として転属することができたんです。私は生命の危険すら感じていたからもう何の試験でもよかった。とにかく一日でも早く受けられる試験というのが「整備」だったんです。興味があったわけでもないけれど、なんとかそれに合格して半年間乗った「八重山」から横須賀にある追浜海軍航空隊に移ることができました。昭和 15（1940）年５月のことです。

空母に乗り込み戦地へ

航空隊で半年間整備に関する学校に通い、四等一般水兵から三等整備兵になりました。海軍になると一人一人兵籍番号というのがつけられてね、今でも覚えていますよ。「佐志整 2143」。佐世保の志願兵、整備兵という意味ですね。その後、私はあの航空母艦（空母）「飛龍」に乗り込むことになったのです。昭和 15 年 11 月頃、ここから本当の艦隊生活がはじまったわけです。

空母はなんといっても海軍の花形。太平洋戦争以降は航空戦が主流となり、海上で戦闘機が離発着する空母が一番の戦力になっていたんです。それでも当時国は戦艦大和を作ったわけですが、あんなもん無用の長物ですよ。アホみたいに大きな戦艦作ってね。

長さ 230 メートル、幅 24 メートルの空母「飛龍」に佐世保から乗り込んで、戦闘のない時は、ずっと洋上訓練をしているんです。いくら大きいと言っても海の上に浮かぶと小さなもの。そこをめがけて戦闘機がばんばん発着訓練をするんですが、これが命がけ。僕ら整備兵はこれに爆弾を抱かせたり、整備したりするんです。鹿児島湾で低空飛行の訓練をよくしていたのですが、あとから聞いたらあれが真珠湾攻撃の訓練やったんです。だいたい丸一年くらい洋上訓練を重ねました。

アメリカとの戦争に疑問も

そして、昭和 16（1941）年 11 月 24 日、自分も乗り組んだ空母「飛龍」は千島列島択捉島の単冠湾に集合して、艦隊を組んで真珠湾に向かうことになりました。奇襲攻撃なので隠密行動をとらないといけないでしょ。だから商船にも出会わない時期に最も荒れた北太平洋を回る航路を取ったんです。30 年前までの気象条件を精査して選んだそうですよ。

我々も知らされたのは出航後。よほど大きな演習だなと思っていたら、艦長から真珠湾攻撃について知らされたんです。世紀の作戦を告げられても乗組員は特別湧くこともなく、淡々としていました。なんせ訓練で既に命がけの体験をしていますしね。12 月 8 日、真珠湾攻撃の結果はご存知の通りです。

でも、私はアメリカと戦争をすると聞かされたその時、心の中では「こんな戦争をおっぱじめて大丈夫かいな」と思っていましたよ。ちょっとは地理を知っていたので、日本みたいな小さな国が原油もないのに、どうやってアメリカと戦うのかと。

①瀧本邦慶さん

ミッドウェー海戦の真実

真珠湾攻撃の後は、ベトナム、ジャワなどの東南アジアの産油地域を押さえにいきました。いわゆる南方作戦です。これが快進撃を続け、国中が浮かれまくっていました。勝ち戦ばかりで敵なしの状況でしたから。こんな状態でミッドウェー海戦へ向かいました。昭和17（1942）年5月27日海軍記念日に出撃したのです。赤城、加賀、蒼竜、飛龍。海軍の虎の子とも言える４つの空母で艦隊を組んで、鼻歌まじりで出動したんです。でもこれがわずか一日で壊滅するんです。敵はこちらの暗号をすべて解読していたようです。

私の乗っていた飛龍には1500名が乗っていたのですが、爆撃を受けて1000人が亡くなりました。私は何とか船の端に逃げて生き延びたんです。爆撃を受けて燃え盛る飛龍は全速で逃げるのですが、私たちは艦長の命令なしに船から逃げる訳にはいきません。海軍は自分の意志で船から離れると逃亡罪になってしまうんです。空を見ると飛龍から飛び立った航空機が着艦しようとしているけれど、燃え盛る「飛龍」には着艦できない。上空を旋回し、燃料がなくなるとともに次々と海に突っ込んでいくんです。私たちはそれをじって見てることしかできない。これが戦争の実情です。

艦長から、生き残っている者は駆逐艦に乗り移るように命令を受け、我々も近くの船に乗り込みました。それでも飛龍はまだ沈まない。いつまでも浮かんでいる空母は、アメリカ軍に戦利品として取られてしまう。そうすると軍事機密が敵に渡る。そういう判断から私たちの乗り移った駆逐艦から２発の魚雷を飛龍に向けて発射させ自らの手で撃沈させたのです。責任を取った艦長と司令官もまた乗り込んだ飛龍ともに海に沈められたのでした。そんなこと信じられますか。

内地へ帰ると、ミッドウェー海戦では４つの空母が壊滅したのもかかわらず、大本営発表は「１隻撃沈１隻大破」というもの。それが戦争の実情です。政府や国が何を言っても、だまされたらあかん。鵜呑みにすることなく自分の頭で考えないといけない。自分の命は自分で守らないといけない。国はいざとなったら命を守ってくれない。私が若者たちに伝えたいのはそういうことです。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

瀧本さんはミッドウェー海戦からの帰還後、海軍での立身を目指して１年間海軍高等科で学び翌昭和18（1943）年６月には下士官に昇進し、海軍二等整備兵曹として任官することとなる。昭和19（1944）年１月に五五一航空隊に入隊。南方作戦の重要な補給地であったトラック島へと上陸すると同時に、１万５千人の戦死者を数える奇襲攻撃を受けた。壊滅状態の島には食料、医薬品がほとんどなく

部隊は裸同然。多くが飢餓生活を送る中でも上官だけが銀飯を食べることへの矛盾や、仲間同士が争い合う姿に改めて「一体誰のための戦争なのか」ということについて考え直したという。まさに九死に一生を得た、これら一連の体験は平成18（2006）年 12 月に自ら筆を取り『それでも君は銃をとるか』としてまとめられている。

参考資料：
2006 年若者に告ぐ私の戦争体験と主張『それでも君は銃をとるか』瀧本邦慶
毎日新聞連載『平和をたずねて』広岩近広（2013 年 5 月 28 日～全 20 回）

②坂上貞夫さん

淀川河川敷から見た長柄橋の空襲

坂上　貞夫（さかがみ　さだお）さん（83）　昭和７（1932）年　大阪市東淀川区生まれ。高槻中学在学中に、昭和 20（1945）年６月７日の第３次大阪大空襲に遭遇し、長柄橋への戦闘機による機銃掃射や爆撃直後の淀川河川敷を目撃した。６月９日、石川県へ一家で疎開し、終戦後大阪に帰る。現在は大阪城でボランティアガイドとして活躍するほか、戦争体験の語り部としての活動も行っている。東淀川区在住。

※本稿は、インタビュー原稿に、後日寄せられた坂上さんの手記を加筆し完成したものです。

昭和 20 年６月７日　第三次大阪大空襲
淀川河川敷と長柄橋の地獄

　私にとっての戦争の記憶は、昭和 20 年６月７日の空襲です。恐ろしい実態を経験いたしました。昭和 20 年３月に東淡路国民学校を卒業し、親の勧めで高槻中学（今の高槻高校）を受験、合格しました。高槻中学を受けたのは、大阪医科専門高等学校（今の大阪医科大学）の付属高校のように親が思っていたようです。医者になれば戦争に行かなくていいからという配慮でした。

　第１回大阪大空襲（昭和 20 年３月 13～14 日）までは、夜になるとゲートルを足に巻いたまま寝たり、家の向かいにあった広さ６畳ほどの防空壕（３家族 14 人が出入りしていた）で寝たりしていましたが、大空襲以降は毎晩のように警戒警報・空襲警報のサイレンが鳴っていて、毎晩壕の中で寝ることになりました。

②坂上貞夫さん

６月７日、第３回大阪大空襲の時は高槻中学で授業中でした。「大阪方面に警戒警報が発令されたので大阪市内から通っている生徒は帰途について由（よし)」と先生に言われました。和歌山県潮岬あたりに米軍機が来襲すると大阪地域に警報が出るようになっていました。大阪市内から通っていた私と２人の学生は、すぐに学校を出ました。新京阪電車（現阪急京都線）高槻駅まで行っても電車は止まっていて、駅員に聞くと「国鉄（現 JR 東海道線）も止まってしもうた。大阪行きの電車はないよ」とのこと。大淀区中津（現北区）へ帰る友人・福島区野田へ帰る友人と３人で、大阪市内まで約 20 キロの国道（高槻京都線）を歩いていると、トラックが１台走ってきたので、合図をすると止まってくれました。電車が止まっている事情を話すと「長柄橋の手前まで行くから」とトラックの荷台に乗せて送ってくれることになりました。

後日の資料によると、９時頃に警戒警報が出たそうで、トラックに乗ったのは９時 15～30 分頃であったと思います。空襲は 11 時９分からだったようです。

トラックは、まばらな家並みや田んぼ、畑を見ながら国道をどんどん走りましたが、茨木の街中を過ぎ吹田の手前にさしかかったあたり（吹田市七尾付近）から、周囲が燃えているんです。このあたりは田んぼや家が点在しているだけでした。吹田のアサヒビール工場の手前あたりには、道路の両側に木造の２階建ての家や商店が連なっていて、そこが真っ赤な炎をあげて燃えていました。トラックの運転手さんは、燃える中を走るために、車を停めて防火水槽を探し、荷台にあったむしろに水を浸して、それをかぶって燃える火の中を通り抜けました。その間数秒だったか数分だったか。

上新庄に入り、まばらな家屋や青い田んぼの中を走り、鐘紡(カネボウ)中島工場入口手前で降ろしていただきました。鐘紡は繊維工場ですが、当時は飛行機の部品製造をしていたようです。現在は東淡路の交差点のそばの「エバーレ」の名前のマンション群がある集合住宅街です。

運転手に礼を言って車から降り、歩くこと約５分、淀川の土堤に上がりました。11 時半ごろだったと思います。赤川の城東貨物線を越えた時、淀川の上を南の方から戦闘機が２機低空で飛んできて、我々のいる東淡路の交差点の上空あたりで 45 度くらい旋回して西の長柄橋のほうへ飛んでいきました。最初は日本の戦闘機かと思い頼もしいなと感じましたが、それはすぐに機銃掃射を始めたのです。

淀川の堤は砂地なので弾が当たるとパンパンパンという音がして、転々と同じ間隔で砂煙が舞い上がり、３人ほどの人が寝転んだように見えました。多分死んでいたと思います。

はじめて敵の戦闘機だと分かり恐ろしくなり３人は草むらに死んだふりをして

寝転びました。数分寝ていましたが再び敵機が来る気配もなさそうだったので歩きだしました。道中は子ども連れの母親、大きな荷物を背負った老人、疲れ切った人々の顔・顔・顔･･･。河川敷の方を見れば、あちらにこちらに横たわっている人、片足を引きずって歩いている女の人、泣いている男女･･･見たことのない光景が目に飛び込んできました。河川敷に降りていたら更に地獄絵図を見たでしょう。

しばらく歩いて柴島消防署の前まで来ると我が家の屋根が見え、焼けていないのにホッとしました。友達を待たせて家に走りましたが戸が閉まっていて開きません。そのとき空襲警報解除のサイレンが鳴り響き、しばらくそこに立っていましたら、大きな荷物を何段にも背負った母親と２人の弟が、赤川の堤防のほうからとぼとぼ歩いてきました。無事一家が揃い、一安心して、長柄橋に向かいました。柴島神社の近くから堤防へ抜ける道の途中に、コンクリート製の牛馬の水飲み場がありました。当時は車ではなくて牛馬が主流でしたから、所々に休ませる場所があったんです。そこに、牛が２頭横になっているんです。血が出ていないのに死んでるわと。後で考えてみると、あれは爆風で飛ばされたんだなと思いました。

当時、この堤はさらしの干場でした。柴島はさらし工場が 50 社くらいあったんじゃないかと思います。織機で木綿の生地を作りますと、幅 60 センチくらい、長さ 30 メートルくらいの生地ができるんです。それは最初黄色いので、淀川の流水にさらして白くするという工場がありました。箱舟という四角い船をつくって、さらしを流すんですね。洗ったら堤で干していました。水源池ができるまでは、現在の崇禅寺のライフからキリスト教病院のあたりまでが干場でした。あのあたりは芝生だけのがらんとしたところで、崇禅寺と家がぽつりぽつりと建っているだけの場所でした。

長柄橋の手前まで行って左の河川敷を見ると、堤防にも斜面にも血を流して横たわる人、うずくまる人、それを手当てする身内らしき人々が見えます。河川敷の砂や草は血で真っ赤に染まっていました。また爆弾の落ちた穴が堤防の下に見えました。すり鉢状になっていて、その中に人間が落ちているんです。這い上がろうとするんですけど、砂地ですから滑って落ちてしまうんです。直径 10 メートル、深さは５メートルくらいあったかな。結構深かったです。堤防を歩く３人にとっては地獄絵図を見るようでした。

橋のたもとへ来ると、今度は長柄橋の北詰のところが燃えていました。鉄筋の橋なのに何でかなと思いました。後日調べるとアスファルトの下の木レンガが燃えていたのだそうです。

橋の手前から橋の下をのぞくとあちらこちらに横たわる人、泣いている子ども･･･橋の上でも数人が血を流していて手当てをしているような光景がありました。地獄でした。３人は目を背けながら早足で南詰まで渡り、南詰にあった新京阪の長柄橋駅に友人を送り、別れました。別れた友はそれから消息がわからなくなってしまいました。

長柄橋の南詰にあった長柄駅は、今はなくなってしまいましたが、ここから天六駅まで高架になっていました。天六の駅は７～８階建ての新京阪百貨店の２階から電車が出ているという珍しい駅だったんです。千里山行きと四条大宮行き２本のプラットホームがありました。電車は日本一の頑丈な列車だったらしくて、今でも正雀の車庫で保管してあるはずです。

帰りは長柄橋の反対側の歩道を歩きましたが、橋の真ん中が爆弾で大きく陥没して、穴が開いていました。付近には木レンガ、鉄くず、コンクリート等の残骸がむき出しになっていて、遺体が２～３横たわっていました。急いで燃える家屋の炎を避けながら家路につきました。

崇禅寺付近の空襲被害

家に入るなり母親が、組長さんの奥さんが崇禅寺に避難したがまだ帰ってこない、探しに行った息子も帰ってこないので、私にも探しに行けというので、
急いで崇禅寺駅の踏切を抜けると、駅近くの家々は延焼、晒しの干場にはあちこちに爆弾の穴があり、焼夷弾が土にささって青い炎を出して燃え、遺体の血で草が赤く染まっていました。またたくさんの人が横たわったり泣いたりしていました。いたたまれない情景の中、あちらこちらを探しますが見当たりません。干場をあきらめ崇禅寺に行くと、赤い炎が今を盛りと燃え上がり近づくこともできません。崇禅寺にも人が避難していましたが、爆弾・焼夷弾・機銃掃射等を受けたくさんの方が亡くなりました。崇禅寺付近の空襲は、淀川河川敷より多大の人的被害を被ったようです。中島惣社にも行きますがやはり同じく燃え上がっています。数体の遺体を確認しましたが見当たらず再度干場を探してから帰途につきました。

その晩の食事、母、弟２人と自分の４人家族は丸膳を囲み無事を喜びました。父は昭和 19 年夏、中国山西省太源へ出征していました。その晩は空襲の時に母が担いで逃げた風呂敷から布団を出して寝ました。風呂敷には布団のほか、貴重品・さつま芋のつるを入れたメリケン粉の団子、ボンボン掛け時計が入っていました。

なぜ時計かというと、公務員の給料が 50～60 円だった時代に、１台 60 円もしたそうです。非常に高価なものだったんですね。今では笑い話です。

②坂上貞夫さん

一家で石川県（能登）に疎開

我が家は、親の里である石川へ疎開することになっていました。６月９日夕方、みな大きな荷物を持ち国鉄吹田駅まで歩きました。国鉄、新京阪電鉄、阪急電鉄等は運休していますが、吹田からは国鉄北陸線が動いていると聞いたからです。８時発の新潟行列車に乗り、朝金沢で輪島（能登）行きに乗り換え、２時頃に疎開先である石川県の能登の穴水（あなみず）に落ち着きました。

疎開中は地元の国民学校の高等科に転校しました。ほとんど授業はなく、教練や防空訓練、また運動場でイモを育てるなどの畑作りの毎日でした。通学の１里（４キロ）が遠くて、授業をサボったりました。疎開者いじめもありました。

８月１日夜半には富山市が爆撃にあいました。穴水から対岸にあるので空が真っ赤に焼けているのが見えました。大阪の空襲が思い出されました。

８月 15 日の終戦を知ったのは 17 日でした。自分の精神的な支えが奈落の底に崩れ落ちるのが分かり、どうすれば良いのか制御できなかったことを覚えています。

穴水では翌年の３月まで過ごしました。２月に帰阪が決まり、懐かしの家に落ち着くことができました。

一年遅れて旧制中学をめざすことになり、市岡中学（現市岡高校）を受験することにしました。大阪の府立中学校の帽子には白い線が入れてあり、１本が北野、２本が天王寺、３本が市岡、４本が茨木だったと思います。市岡をめざしたのはこの帽子の３本線と電車で通えるのが目的でした。受験は合格しましたが、北野中学に入学することになり、がっかりしたことを覚えています。

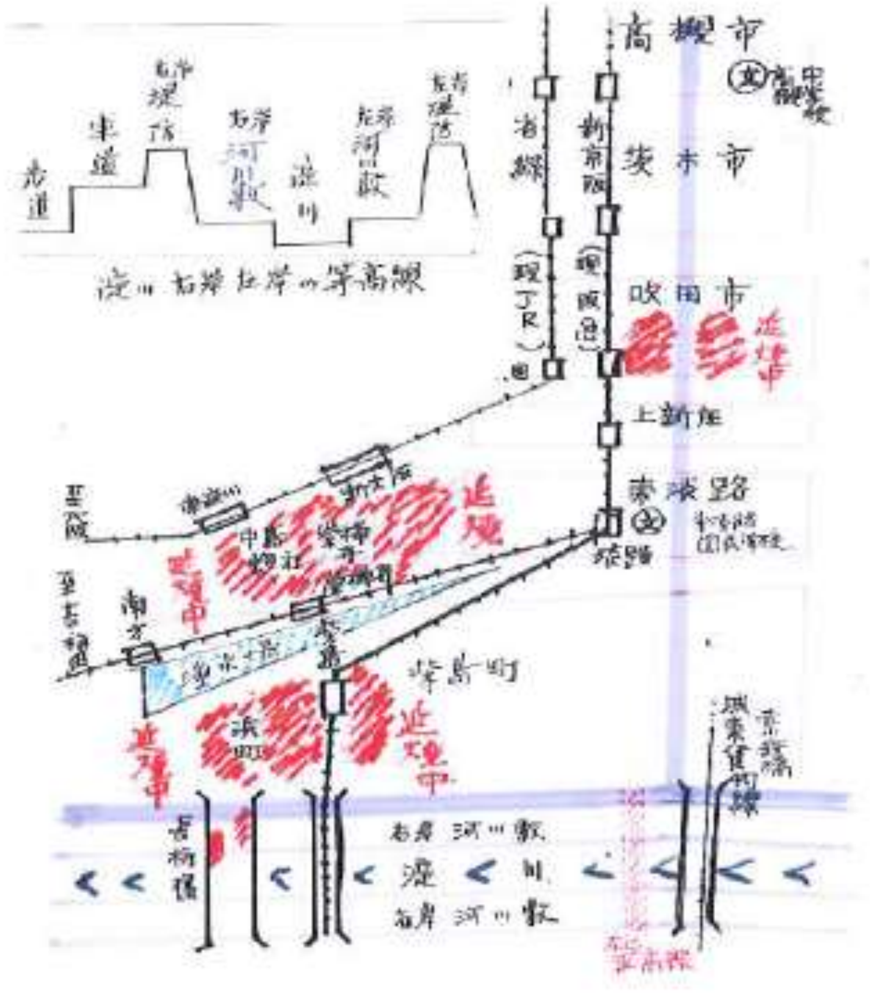
戦後の食糧の買出し

戦後、一家４人の食糧配給では十分食べることができず、週１～２回は闇米を求め買出しに行っていました。行き先は奈良・滋賀・三重が多く、農家へ行って直接交渉です。さつま芋、米、南瓜、その他野菜を、現金もしくは母の着物を持っていって交換しました。終戦から４～５年は苦労しましたね。ある日、私一人で買出しに行き、近鉄電車・伊勢中川の農家で米２升（2.8 キロ）やさつま芋３貫（約 11 キロ）を買い、電車で名張駅に到着したときです。向かいの電車に乗換えてくれと全員降ろされました。地下道に巡査が５～６人いて荷物検査を受けました。私の番で、食糧統制令違反で荷物の全没収を告げられました。血気盛んだった私は、頭にきて調べた巡査の胸ぐらを捕まえ投げつけたところ、２～３人の巡査が私の体を押さえて、手錠をかけられ車で名張署に連れて行かれました。一晩拘束され翌朝無罪放免となりましたが、この件は、同じ電車に乗り合わせていた名張町長の尽力があったそうです。後日名張町長に礼状を出しました。

②坂上貞夫さん

戦争は、生活のすべてを破壊し、心をむしばみ、苦難の道を歩かされました。食うや食わずの日々で、この世の地獄を見せ付けられました。２度と同じ苦難に遭うことなく、平和に・幸福に、生きることを望みます。

高槻から長柄橋までの経路（坂上さん直筆メモ）



＜取材メモ＞

戦争体験の語り部もされている坂上さん。取材当日は 1945 年 6 月 7 日の長柄橋周辺の見取り図をその場で描いてくださり、70 年前の記憶がいかに鮮烈なものであったかがひしひしと伝わってきました。

③清水正子さん

子育て中の戦争体験と食糧事情

清水 正子(しみず まさこ)さん (95) 大正 8 (1919) 年 兵庫県生まれ。
戦争当時は上新庄地域に暮らしていた主婦。二人の小さな子どもを抱えて空襲から逃れた。

昭和 14 (1939) 年に鴨野から上新庄に引越してきました。今住んでいる場所 (豊新 4 丁目) からもすぐ近くの場所です。このあたりはとにかく田んぼや麦畑だらけでした。戦争の時には家の前あたりの田んぼの土手に防空壕を自分たちで掘って、そこに避難していましたよ。

とにかく食べるもんがあらへんし、大豆をもろて煎って食べたり、干し芋を煎ったりして栄養を取っていました。このあたりにはセリがよくできたから取ってきて食べたりね。とにかく始末して食べました。私はお産の後やったから歯がぼろぼろでしたね。

昭和 20 年に主人が最後の方の徴兵に招集されてしまって、私は幼子を二人抱えていて不安でした。海軍だったんですが、帰って来た主人の海軍の制服を仕立て直して、子どもの入学式の時に着せたのを覚えています。

戦争の記憶？ そうですね。道ばたに落ちていた空の爆弾を子どもたちと引っ張ったりしたこともありますね。

④岡田匠さん

小学校卒業式前夜の大阪大空襲

岡田 匠（おかだ たくみ）さん（82） 昭和 8（1933）年 大阪市中央区生まれ。
関西電力の支店長の家庭に生まれる。自宅兼支店は心斎橋の近くにあり、大宝国民学校へ通った。昭和 20（1945）年 3 月 14 日に予定されていた国民学校の卒業式のため、集団疎開先だった滋賀県多賀郡多賀町から帰省中に、3 月 13 日深夜の第１次大阪大空襲に遭遇。約 3 時間半にわたり大阪市の中心地が激しく攻撃されたこの空襲により、同級生の多くが犠牲・行方不明になった。焼夷弾で焼けた街の中を走り抜けた体験を、小学校などで子どもたちに伝えている。

小学校からの依頼で、戦争体験をお話する機会をいただくことがあります。話がどうしても一方的になりますので、児童が知りたいことに答えたいと、児童から質問書をいただくと、１番質問が多かったのは「どう逃げたか」で、２番目は「どんな仕事をしたかったのか」でした。

生徒さんたちは航空兵や軍人になりたかったという答えを期待していたようですが、私は医者になりたいと思っていたんです。わたしは姉と父を肺結核で亡くしました。当時結核になったら死を宣告されたようなものです。栄養状態が悪かったので、戦前戦後を通じて流行しました。だから命を救いたいと思うようになったんです。戦争は長く続かないと思っていました。

④岡田匠さん

実家の心斎橋周辺のようす

父親は関西電力の島之内営業所長でした。大きな家で、１階が営業所、私の家族は２階に住んでいました。当時は関西電力で電球の販売交換から高圧線や内線、外線、トランスなどの修理も扱っていたのです。注文があれば扇風機の貸し出しなんかもしていましたね。ご飯は電熱器で炊きました。でも、当時はおかゆを２杯食べるのがやっと。おかずを食べた記憶はあんまりありません。

当時大丸とそごうの間に映画館があって、戦争中はドイツの映画をやっていました。アメリカの映画は見れないので、ドイツの映画ばかり見ていましたね。Uボートや急降下爆撃機など、戦争ものが多かったです。

湊町の駅周辺にはアメリカの捕虜がたくさんいて、使役されていました。昭和19年には御堂筋を行進する陸海空軍も見ました。淀屋橋から難波までそうそうたるパレードでした。戦車、短剣を持った海軍の白い制服が格好よくてね。

また、憲兵は、取り締まりのためによくこのあたりを歩いていました。子どもでも怖かったですね。腕章をし軍刀を持って巡回したり、街角に立っていたり。

大阪大空襲の記憶

昭和20（1945）年３月14日が卒業式だったので、当時国民学校６年生だった私は同級生と一緒に３月の始めに大阪へ帰ってきていました。浪速区の大豊小学校です。久しぶりに家族に会えると電車の中で皆で喜んでいました。しかし、卒業式の前の晩３月13日の夜間から14日にかけて、３時間もの大空襲に遭うことになりました。第１次大阪大空襲です。滋賀の疎開先にいたら生きながらえていたはずですが、同級生の45人中25人が亡くなり、20人が行方不明になってしまいました。５年生以下は疎開先にいて無事でした。８月に帰ったとのことです。

B29から落とされた焼夷弾は、枝葉に分かれるように広がりながら落ちてくるので、花火のようでした。火が風を呼んで、炎が水平に広がるのを見ました。当時は、焼夷弾に当たると体が溶けてしまうから、絶対に当たらないようにと教育されていました。でも、落ちてきたものは体を溶かすどころか、まちを燃やし尽くすものでした。

最初は私の家には焼夷弾が落ちなかったので大丈夫と思っていたら、あとから火の手が迫ってきたので炎の中を走って逃げました。本当に火の中へ飛び込むようにして走りました。まちは炎とスモッグでひどい状態でした。

当時は火が出れば皆で水をかけて消すことが義務付けられていて、消そうとしている人々もいましたが、自分は違反をして助かったのです。

翌日、御堂筋に出たら大勢の遺体が並べられていていました。人間の感覚というのは怖いもので、それだけ多くなると感覚が麻痺してしまうんですね。火の中で倒れた人や防空壕に逃れた人も皆蒸し焼きになってしまって、消防団が掘り起こしてむしろをかぶせていました。遺体は難波まで累々と並んでいました。
途中でB29が落ちているのを見ました。高射砲で撃墜されたものです。中をのぞくと７人が乗っていましたが、驚いたのは戦闘員ではなかったことです。背広を着た人や女性もいて、どうやらプレスだったようです。それでも皆つばをかけたりしていました。

二度目の疎開中に再び空襲に

学校も燃え、もちろん卒業式は中止。家も財産も全て焼けてしまって生活ができません。岡山へ行こうと現在のＪＲで逃げました。屋根の上や機関車の前までたくさんの人が乗っていました。すると今度は三宮で17日の神戸大空襲に遭ったのです。私は列車の中にいて助かりました。

人間というのは２～３日食べなくても平気なんですね。空襲から何も食べませんでしたが、神戸で炊き出しがあって、おにぎりをひとつもらって食べるまで全く空腹を感じませんでした。

岡山の姫新線で津山のほうへ行ったのですが、遠い親戚ではあるけど縁はない家です。許可なしで勝手に逃げていったので、先方からすれば招かれざる客です。小農家だったので自分と子が食べるので必死という感じで、食べるものがなくてどん底生活が続きました。山のタケノコを取って「泥棒！」と大声で叫ばれて、それ以降は村でものがなくなるとすべてうちのせいにされました。虚弱体質というか、成長期に食べられないので大変でした。大阪にいても食べるものがなかったと思います。疎開先での食事は重湯のような雑炊が多かったですね。食べるものがないから正月に近所の農家へ行くと、親切にご飯を食べさせてくれました。１食だけ、それもおにぎりなどでしたけどね。ある女の子はひもじさのあまり、歯磨き粉を食べていたくらいです。ひもじい思いをしながら、５年ほど暮らしました。悲劇の少年時代でした。

東淀川には昭和30年から住んでいます。少年時代に戦争を体験し貧しい辛い生活でしたが、青年時代になって仕事と結婚で生きがいを取り戻しました。子どもを育てたことも大きかったです。

④岡田匠さん

大空襲のため小学校の卒業証書ももらっていませんし、同窓会をしたことすらありません。戦火に遭い、火の中を走って逃げて。生きているのが不思議なくらいです。私ぐらいの歳になると、みな同窓会を開いて楽しくやっているということなんですが、私たちの同級生の多くは 12 歳で亡くなってしまいました。

じつは数年前に大宝小学校へ行ってきました。大空襲で家が焼かれて小学校を卒業していないと伝えました。そのとき、「資料室を見ますか」と聞かれたのですが、本当は友達のことを確認したかったのに悲しくなってしまって帰りました。結局資料は確認せず、同窓会も一度もできていなくて。それが心残りなんです。

⑤松原俊明さん

母に守られて助かった奇跡の子ども

松原 俊明(まつばらとしあき)さん(69) 昭和20(1945) 年 旧東淀川区木川生まれ。生後２日で崇禅寺で空襲に遭うが、母に抱かれて命をとりとめた。その際の機銃掃射で母を亡くしたが、様々な人の助けを受けながら今年70才を迎える。戦後ともに歩んだ人生を振り返っていただいた。

越賀道一と嘉津子の長男として生まれました。父の道一は崇禅寺に生まれた長男だったのですが、当時兵隊として戦争に行っていました。その頃の大阪は空襲が相次いでいて、生まれたての小さな私を抱えた母・嘉津子は木川の自宅から、道一の妹夫婦（西岡祖学※・マキコ）がいた崇禅寺の平屋に疎開することになったと聞いています。

そんな中で空襲に遭いました。生後２日目（昭和20年６月７日）のことです。今も崇禅寺の境内に残るクスノキの前に離れの平屋があって、私を抱いて逃げようとした母は機銃掃射で眉間を打たれて即死しました。幸い私は母に守られて命を取り留めました。もちろん、私は覚えているわけありませんが、法事なんかで親戚が集まるたびにこの話は聞いてきましたよ。

終戦後、父の道一は戦地から戻り、崇禅寺は西岡祖学さんら妹夫婦にまかせ、自分は尼崎の全昌寺へと行くことになります。とはいえ妻を亡くして乳飲み子である僕を抱えて行くわけにもいかない。そこで私は嘉津子の母、つまり母方の祖

母・松原ヒサ子の養子にもらわれることになりました。松原の家には姓を継ぐ子どもがいなかったのも理由だと思います。

木川東にあった祖母の家で二人で暮らしていましたが、小学校にあがることから叔父と叔母も一緒に暮らすようになりました。この叔父さんと叔母さんがとても厳しい人でしてね。二人には子どもはなかったので、自分の子どものように育ててくれた。僕が今あるのは彼らのおかげなんです。自分の境遇について理解したのは小学校３～4 年生の頃でしょうか。

木川小から十三中学、北野高校に進学し、関西学院大学の経済学部に入学しました。大学では謡曲部に入り、同志社女子大学の能楽部長と知り合ったんです。その時の彼女が今の妻。卒業後、神鋼商事に入社し 26 才で結婚して２男１女に恵まれました。今は孫が５人もいます。

毎年、お盆とお彼岸、家族の命日には崇禅寺のお墓にむかいます。お堂の向いにある母の墓を訪ねて、大きなクスノキを見るたびに「お母さんはここで僕の代わりに亡くなったんだなあ」と思いますね。戦争で孤児になった人も多かったのに、僕は母親の分まで命をもらって、まわりのみんなに助けてもらうことができた。生みの親より育ての親。本当に感謝しています。実は最近、次男を 37 才で亡くしました。まだ小さな子どももいるので、今度はおじいちゃんの僕が頑張って手助けできればと思っています。

僕は戦争の経験があるわけではないけれど、絶対にしたらあかんと思います。戦国武将の話は好きですが、それと戦争は違いますもんね。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

※西岡祖学氏（崇禅寺前住職）の手記は『ながら　−大阪大空襲を語り継いで−』昭和 58（1983）年に「兄嫁の死−崇禅寺の惨状」として掲載。6 月 7 日の空襲では崇禅寺の境内に１トン爆弾が４つ、小型爆弾や焼夷弾が無数に落ち、戦後不発弾として二つが発見されている。この空襲で多くの人々が亡くなり啓発小学校下（山口町、日之出町、飛鳥町）518 名の埋葬に、住職として立ち会った祖学氏。あまりの数に焼くことができず土葬にしたが、戦後 10 年ほど経ち、あまりにも気の毒だと掘り出し、長柄に運び洗って火葬にして戦災者の墓碑を２カ所に作っておさめたという。今も崇禅寺では６月７日には慰霊祭が開かれている。